江戸川大学学生新聞

THE EDOGAWA TIMES

VOL.5 #5
2015年6月3日(水)

取材／編集：学生記者クラブ
発行：江戸川大学広報センター

個性豊かな作品が並ぶ 書道・水彩スケッチ展

4月24日から5月6日まで西武・そごう柏店のおしゃれギャラリーで、江戸川大学のオープンカレッジ受講生による書道・水彩スケッチの合同作品展が開催された。同所での開催は3度目だ。書道講座の講師は村竹恵子先生が、水彩スケッチ講座の講師は村竹清先生がそれぞれ担当している。（撮影：石原健太郎・大塚桜　文：田中啓史・遠藤只光）

読んで、見る 新しい書道の形

書道講座は4クラスで1クラス10人前後。年2回展示会を行っている。1回目は、このそごうでの展示。2回目は、江戸川大学の学園祭、駒木祭での展示だ。

今回の展示作品は、クラスごとに、テーマがことなる。あるクラスでは、ひとつの楽曲の詩を、縦書きで天の余白の幅だけ決めて、あとはクラス全員で一節ずつリレーで書いた。

別のクラスでは、自分の思い出の曲ということで、沖縄民謡の『芭蕉布』や、井上陽水の名曲『少年時代』の一節が書かれていた。一見すると絵のように見えるけど、立派な書。個性あふれる作品が目立った。

これらの作品はテーマの決定から完成までに1か月から3か月かかっているそうだ。その間、村竹恵子先生がひとりひとりに手ほどきをした。それぞれの生徒たちのテーマや個性にあわせて字体や構成を指導している。

村竹先生自身の作品は、地下1階に展示されていた。そこには、江戸川大学職員の書道部による作品も展示されていた。テーマは、自分の名前もしくは好きな漢字の一文字を自由に表現すること。様々な漢字が表現に工夫をこらして構成され、まるで絵画を見ているような気になった。村竹先生の「書」にたいする哲学が生徒たちの作品にも反映されているのだろう。

じつは書道展に出品された作品には、クラスごとのテーマの他に書道展全体に共通する方針があった。それは「作品が読めること」。読めることで作品はさらに親しみをますのだ。

上：村竹恵子先生
右：来場者からは斬新な書に驚きの声が

愛情があふれる 水彩スケッチ

水彩スケッチ講座は初めて水彩スケッチに挑戦した受講生が多いのだが、とても素人が描いたとは思えない作品が並べられていた。その多くが綺麗な風景を絵にしたものだったのだが、その絵の中でひときわ目を引く作品があった。

通常のサイズより二回り小さいサイズの紙を3枚使った絵だ。「食べるッ！」と題されたこの作品では、微妙に異なるカットでお孫さんがご飯を食べる姿が描かれている。

作品を描いた神﨑須磨子さんは、「静止画を絵にするのが王道だが、躍動感を描きたかった」。その優しさのあふれる幸せな絵は、来場者の足を思わず止めさせていた。

「この年になってみんなと勉強できるのは嬉しい」と笑顔で語るのは受講生の手塚京子さん。「もう一度学校に入ったみたいでとても楽しい」

和気あいあいとした雰囲気だが、そんな中でも受講生同士が切磋琢磨し意欲的に勉強することで、絵のレベルを飛躍的に高めているのだろう。

旦那さんと共に8年前から講義に通う若林倫子さんは、二人で一緒に出掛けても「この風景は絵になる」などと夫婦間での会話が増えたという。水彩スケッチは絵を学ぶだけではなく夫婦間のコミュニケーションツールとしても一役かっているのだ。

最後に村竹清先生にお話を伺った。「私がお題を出して描いてもらうことはない。自由に描きたいものを描いてもらい、私はその絵のお手伝いをするだけ」。先生はそう優しく微笑んだ。受講生のおおくが長く通い続けている一番の要因は、この人柄なのだろう。

受講生の作品を眺めながら「みなさんお上手でしょ」そう満面の笑みで話す先生の横顔からは、人と絵への愛情が溢れている。

上：村竹清先生
右：「食べるッ」を描いた神﨑さん

学生記者募集！

学生記者クラブは、学内外のイベントや、部活動、サークル活動などを取材します。
記事は「江戸川大学学生新聞」として発行するだけでなく、ウェブにもアップして世界に向けて発信していくプロジェクトです。
「Journalism」とは「発見や感動を相手に伝えること」。あなたもジャーナリストになろう！

N 棟1階の受付にお気軽に声をかけてください。連絡先：TEL(04-7152-9908)E-mail(kouhou@edogawa-u.ac.jp) 広報課